

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 朴 炳道

本論文は、災害という生存の危機に対する文化的認識や対処の過程を「災害文化」と捉え、近世日本における地震・火災・飢饉・噴火・疫病の流行等、種々の災害を研究対象として、それらをめぐる呪術的対応や死者に対する慰霊、終末観、象徴的表現の分析を行うことで、宗教学的視点からの体系的アプローチを試みた意欲的な研究である。

本論文は八つの章から構成されている。第一章では、「災害の宗教学的研究」に着手するにあたって、各言語圏での災害研究の動向を踏まえ、「災害」定義の問題や「災害」理解の学説史を整理した上で、呪術・終末・慰霊・象徴という四つの宗教学的認識と実践をめぐる宗教学的観点を導入する意義や、研究対象と扱う資料について説明を施している。第二章から第七章は、江戸初期から江戸末期に至る諸種の災害を主に時系列的に取り上げた各論部である。第二章では、本論文が「災害見聞記」と称する資料の一つである近江・若狭地震災害を記録した『かなめいし』に即して、そこに描かれた終末論的認識と呪術的反応が検討されている。第三章では、明暦の大火における大量死者の埋葬や慰霊の問題が、「諸宗山無縁寺回向院」の歴史と名称から分析されている。第四章は、享保の大飢饉を中心に、餓死者の埋葬と「飢人地蔵」と称される地蔵像群をめぐる行われた慰霊・供養に迫っている。第五章は、第三・四章の考察を踏まえ、近世の災害死者をめぐる認識と実践にアプローチするために、東アジアにおける比較の視点も導入しながら「無縁」概念の考察を行っている。第六章は、文久麻疹大流行と「はしか絵」に注目して、災害原因と災害対処の象徴化を検討している。第七章は、「はしか絵」に加えて、「疱瘡絵」や「鯰絵」「コレラ絵」を「災害錦絵」として包括的に取り上げて幕末災害における象徴化の問題を比較の視点から考察している。第八章では、本論文全体に対するまとめが行われた上で、日本宗教研究、比較研究、一般理論化という三つの観点から、今後の「災害と宗教」研究の可能性についての展望が示されている。

本論文の特徴は、近世日本の災害を対象とした先行研究が、一つの災害事象に限定していたことに対して、海外における人文社会学的な災害研究の動向を比較参照することによって、災害間の特徴の異同を視野に入れた体系的な災害の人文学的叙述を目指した点に求められる。しかし、災害研究を冠した研究に依拠したことによって、踏まえられてしかるべき関連する先行研究への参照が乏しいことが審査において指摘された。また、中世からの接続・影響や、近現代の災害との関連など、より広い歴史的文脈に位置付けて考察する余地も残されている。図版の提示方法についても、さらなる工夫が必要である。とは言え、全体的に高い研究水準に達しており、先行研究には見られない無縁死者と無縁生者の動態的關係への注目、「災害錦絵」という象徴的表現に対する包括的視座など、多くの独創性も認められる。

よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に十分に値するものとの結論に達した。